天理教 江南支部だより

発行先	江南支部
発行日	立教187年９月１日
発行責任者	福西　努
発行住所	甲賀町上野461番地9
９月号	NO290

全教一斉にをいがけデー

９月28日・29日・30日

教祖百四十年祭

一手一つに 世界たすけの歩を進めよう

支部・組での取り組み

江南支部は、統一活動として9月29日、30日：午前8時30分近南分教開集合
密集住宅地をリーフレット配布
甲南組は、9月28日午前10時甲南分教会より天保義民の碑まで神名流しを行い、碑の前で路傍講演を行う
信楽組は、28日は教会ごとににをいがけ活動を行う
甲賀組は、28日は組でにをいがけ活動を行う

一れつ兄弟推進研修会

教区啓発委員会主催

日　時：10月2日午後1時～2時半
会　場：教務支庁
参加費：無料
内　容：講演
テーマ「ひのきしんの原風景に学ぶ」
講　師　池田士郎先生　天理大学名誉教授

朝の信仰読本　中山慶純著

「これくらい大丈夫だろう」が危ない

スーパーへ買い物に行って試食コーナーを見つけると、私はついパクッと一つつまんでしまいます。みなさんも経験ありませんか。「お、こりゃうまい」と思ったら、迷わずかごに入れてレジへと向かいます。

そのとき、同じように買い物をする人を見ていると、行動に二種類あることに気づきます。一つは、商品をかごに入れた後、「どうせ買うんだから」と、さらに二つ三つ口に入れる人。もう一つは、「味は分かったから、家でゆっくり食べよう」と、ひと口でやめる人です。

最初のタイプの人は、商品を買うんだから、「ちょっとぐらい多めに食べても許されるだろう」という気持ちが働くのでしょう。

これと似たような行いを、私たちも知らず知らずのうちにしていないでしょうか。

たとえば、人に何かを教えているとき、最初は謙虚な気持ちだったのに、いつの間にか「この人のためを思って、私は教えてあげているんだ」という気持ちになっていませんか。これは、「八つのほこり」の「こうまん」の心づかいに当たります。

こうまんな人は、上から目線でものを言ったり、高圧的な態度を取ったりします。そういう人からは、嫌なにおいがプーンと漂っていますから、いくら正しいことを説いても、相手の心に染み込んでいきません。

こうまんの反対は「低い心」です。人さまのおたすけをさせていただくときこそ、低い心になることが肝心です。

教祖は、先人たちに「やさしい心になりなされや」と仰いました。この「やさしい心」には、温かさ、低さ、広さ、深さなど、おたすけに大切な要素がすべて含まれていて、そういう人になりなされや、と仰っておられるのだと私は思います。

おたすけをされる側は、こちらの〝本気度〟を見極めて、「この人になら委ねてみよう」「この人の言うことは聞きたくない」などと判断します。

人間は、良いことをしているときほど「これくらい大丈夫だろう、許されるだろう」などと考えが甘くなるものです。そこからさらに、どう低く接するか、どうやったら喜んでもらえるか、と考えることが大切なのです。

時には、相手にとって耳の痛い言葉を出さねばならないこともあるでしょう。その言葉が相手の心に届くようなおたすけ人になるためには、日々の心づくりが大切で、これは一生の勉強です。いつかそうなれる日を目指して。まずはこうまんの心を捨てることから始めましょう。

みんなの教理勉強

だめの教えって素晴らしい

飯田照明

だめ（究極）の教えの何とありがたいことか！

はじめて、本当の聖地を明らかにされた

どの宗教にも、宗祖や開祖の生誕地など、聖地がある。

世界中の注目をあびているのが、ユダヤ教、キリスト教、イスラームの三宗教の聖地、エルサレムである。ユダヤ教徒にとっては、神殿のあったところである。キリスト教徒にとつては、イエス・キリストが十字架にかかり、そののち復活したところである。イエスの墓（聖墳墓教会）がある。

イスラームにとっては、ムハンマドが天に昇ったところである。

この三つの宗教の聖地がこの狭いところに密集し、二千年間争いをつづけている。

イスラームにとつては、その他にも聖地がある。イスラームの三大聖地メッカ、メディナ、エルサレム。中でも、メツカは、ムハンマドの生地で最初に説教をしたところである。そこにカーバ神殿があり、黒い石がある。イスラームが始まる前の黒石崇拝のあとである。

お道の聖地、ぢばは、各宗教の聖地とは全く性格がちがう。ぢばは、人間宿しこみの聖地である。人間創造の聖地であり、それはぢばだけである。人間世界の元初まりの聖地、人類創り出しの聖地はぢばだけであり、他にはない。

ぢばには、親神さまがお鎮まりくださされ、ご存命の教祖がおはす。親神さま、教祖、ぢばはその理一つであり、天理王命の神名がつけられている。世界だすけの発動の根源である。

他の教えの聖地とは、その尊さ、偉大さ、神聖さ、救済の上での意味と価値の大きさにおいて較べようがない。

はじめて、宗教修行の、苦行から解放してくださった

今まで宗教家は、人里離れた山中や深い森の中で、厳しい修行をしたり、生命の危険をおかす荒行を行い、世間や日常生活から超脱する生き方を理想としてきた。

この世でのすべての欲望を忘れ、物質的な幸せや家庭の幸福を捨て、修道院で神への奉仕と祈りに生涯を捧げる姿はまことに尊い。神に人生のすべてを捧げきった姿には頭の下がる思いがする。

しかし、親神さまは果たして人がこの世を捨て、厳しい戒律を守り禁欲の生涯を送ることをお喜びくださるであろうか。与えられた神の恵みをいただき、仕事にはげみ、家庭ををいとなみ、子供を育て、社会を立派なものに作り上げていく生き方こそ、真の神が望まれる生き方ではないのだろうか。

教祖は「里の仙人」の生き方こそ本当の宗教者や信仰するものの生き方であると教えられた。孤独の中で、荒行や苦行に身体をさいなんだり、静かなところで深い瞑想にふけり祈る生活より、もつと大切なことがある。それは、人だすけの生き方である。人々が住み、働き、生きる日常の生活の場からはなれず、人々と共に生き、共に泣き、共

に笑い、汗を出しながら、親神きまに祈り、人だすけに誠を尽くす里の仙人の生き方こそ真の宗教家、信仰者の生き方だと教えられた。

凍てつく雪や水の中で荒行し、祈る人の姿は尊いが、教祖は日常生活の中で、教えを守り、人々の苦しみや悩みを共有して、共に泥をかぶり、共に汗をながしながら、人々を幸せな生き方に導くことの大切さ尊さを教えられた。人々と共に生き、力を合わせて、よりよい世界を創る道を教えられた。あの世ではなく、この世に陽気ぐらし、すなわち極楽世界をつくるようにと教えてくださったのである。

立教百八十七年「こどもおぢばがえり」が7月27日から8月4日までの9日間にわたり開催され、昨年よりも約4万3千人多い15万6千859人が帰参した。

滋賀教区は、本年も京都教区と合同で「こども横丁」を担当した。前半は京都教区が後半は滋賀教区が担当したが、大勢の少年ひのきしん隊や育成係のひのきしんのお陰で無事終えることができた。帰参した子供たちも喜んで頂いた。

江南支部は、８月10日、第３回目の鹿深の家ひのきしんを実施した。

次回は、９月４日午前９時～１１時半です。